

## はじめに

それでは恒例の人権講演会を始めたいと思います。この講演会は実質的には皆さんが初めて経験される大学の授業として位置づけられています。入学式直後に、人権講演会を設定している大学は他にはありません。午前の入学式で、この大学が臨済宗に属する禅宗の大学だとお聞きになったと思いますが、この臨済禅の精神とともに人権尊重・人権拡張・反差別の課題を教育と研究の中心柱に据えているという、全国的にも珍しい非常にユニークな大学でありまして、その一つの現れが入学式直後の人権講演会の設定ということでもあります。

申し送れましたが、私は本学の人権教育研究委員会委員長をしております八木と申します。同時に大学付置の研究機関である人権教育研究センター所長も兼任しています。以後、お見知りおきください。

来週から授業が始まりますが、CDCの基礎科目に「人権」が設定されていまして、前期8コマ、後期8マ、あわせて16コマの人権関連科目を設定し、皆さんには、その16科目のうち最低2科目、4単位が必修として課されてい

ます。人権問題に破格に力を注いでいるということ、ぜひ理解していただきたい。この大学では1980年代以降、その方針を確定し、すでに30年近い年月を経て、大学の一つの伝統にもなっているわけです。ある意味で私は誇り高い伝統だと思っているので、ぜひこの伝統の発展と深化の作業に皆さんにも積極的に今日から参加していただきたいと思います。

人権教育研究センターは基本的には教員の研究組織ですが、これも本学の特徴だと思いますが、人権教育研究センターでのさまざまな取り組みのかなりの部分は、学生さんたちの積極的な参加に負っているという性格もあります。このセンターは本部棟・裁松館4階にあります。どなたも利用できるし、来られれば必ずや楽しい先輩や教職員に出会えるので、時間とお急ぎでなければ、ぜひ人権教育研究センターを訪問してください。コーヒーやお菓子などにありつける可能性もあります。

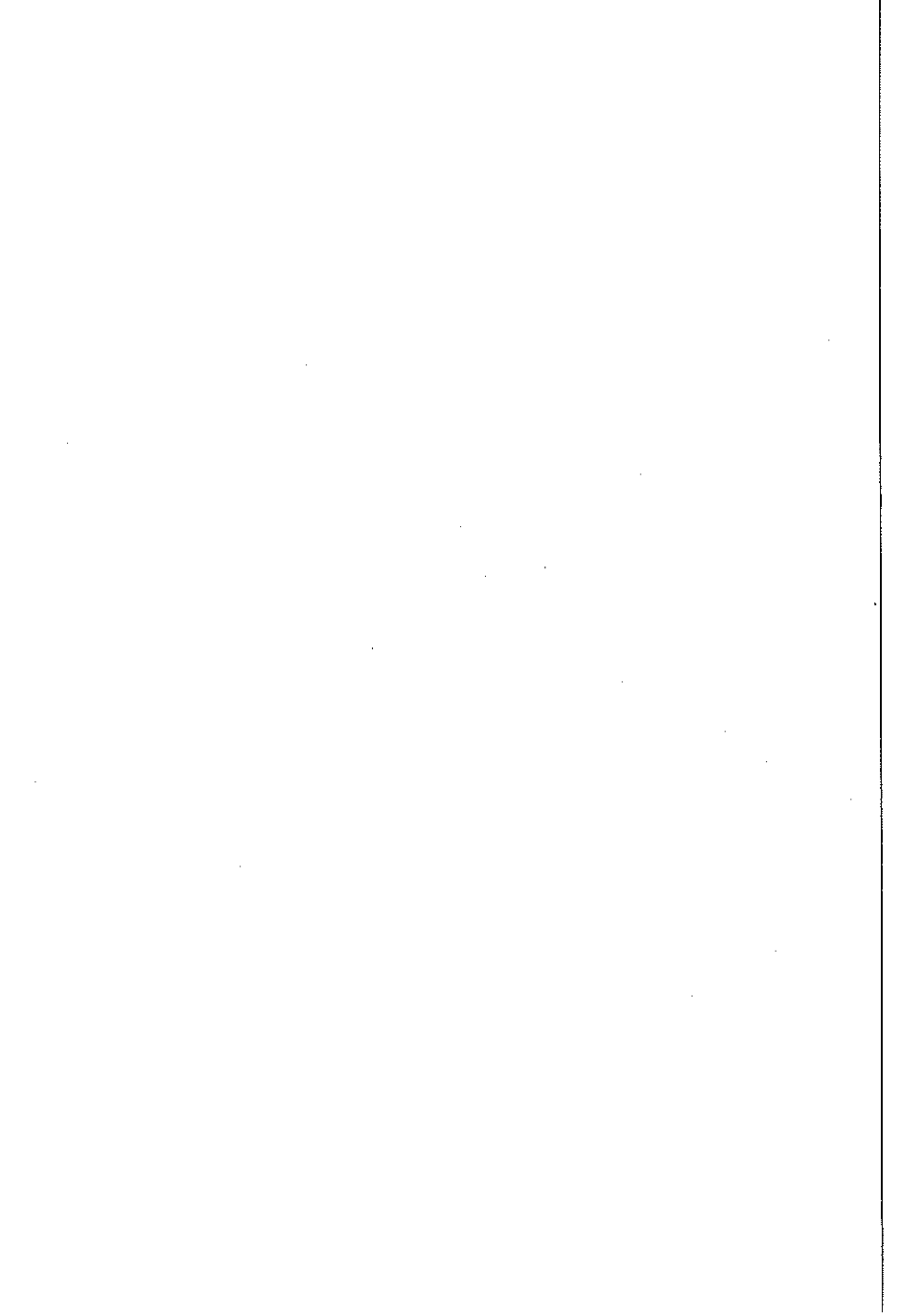
今日は本学の非常勤講師としてこの人権の科目なども担当していただいている社会学者の堀江有里さんからお話をいただきます。今日の配布資料の中に「セクシュアル・ハラスメント防止に関するガイドライン」と「キャ

ンパス・ハラスメント防止に関するガイドライン」(我々の大学ではセクシュアル・ハラスメント以外のハラスメントを一括してキャンパス・ハラスメントと呼んでいます)をも入れています。「セクハラなんか私は関係ない」と男性の多くは考え、もしかすると女性も「被害にあうことはなかろう」と思っておられるかもしれませんが、好むと好まざるとにかかわらず、この社会は差別社会でありまして、しかも今日から皆さん、おとなの社会に入ってきたのです。おとな社会独特の汚濁を経験せざるをえなかったり、心ならずも被害者にさせられたり、場合によっては加害者になってしまうことがないわけではありません。そういうこともきちっと頭と胸の中におさめていただいた上で資料も読んでいただきたいし、今日の話も聴いていただきたいと思います。最後まできちんと清聴していただくように期待して、講師の堀江先生をご紹介しますと思います。それでは、堀江先生、よろしくお願いします。

2008年4月2日

花園大学人権教育研究委員会委員長・人権教育研究センター所長(文学部教授)

八木 晃 介



## “出会い”の可能性

— ハラスメントのない社会をめざして —

堀 江 有 里

(花園大学非常勤講師)

### ▼はじめに

皆さん、こんにちは。ご入学おめでとうございます。  
これから4年間、場合によっては、ちょっと長くいる人もいらっしゃるかもしれませんが、花園大学で学ばれることと思います。私はこの大学で非常勤講師をしています。非常勤というのは、パートタイムのことです。パートタイムですから、金曜日の午後だけ、この大学にきています。私が担当している「人権」（前期：ジェンダー論、後期：セクシュアリティ研究）の授業でお会いする方もいらっしゃるかもしれません。よろしくお話しします。

今日はセクシュアル・ハラスメントについて、お話し

ます。これから皆さんが、大学生として生活するにあたって、おそらくいろんなかたちで関連してくるであろう、セクシュアル・ハラスメントについてお話をすることが目的です。しかし、皆さんのなかには、「セクシュアル・ハラスメント」という単語を聞いても、自分とは遠いものだと感じる方々も少なくないとおもいます。そこで、今日のタイトルを「“出会い”の可能性——ハラスメントのない社会をめざして」としてみました。少し広げてお話しをしようというもくろみです。

セクシュアル・ハラスメントというと、皆さんには、どんなイメージがありますか？ 「セクシュアル・ハラスメント」とか「セクハラ」という言葉には、すでにいろんなイメージがついてしまっていると思います。そのイメージのなかで、多くの方は「自分には関係ないな」と思ってしまうような状態が生まれてきているのではないかと、私は思っています。

そこでもう少し広いかたちで、ハラスメントの問題を考えてみたい。ハラスメントというのは一言で言うと、私は「いじめ」の問題だと思っています。そして、人権、差別の問題だと思っています。

## ▼人間の尊厳を守る、とは？

人権とか差別と言っても、皆さんのなかには、すでにここにいらっしゃるまでにさまざまなイメージがつきまわってしまっているかもしれません。もう少し言い換えてみましょう。ハラスメントの問題というのは人間の「尊厳」にかかわる問題だと、私は思っています。では、尊厳とは何か。人がこの世の中に生まれてくる。一人ひとり顔が違う。そして一人ひとりが異なった名前を持っている。それぞれが異なる存在なわけです。その一人ひとりには、それぞれ、誰にもおかされてはならない領域というものを持っている。その領域が一人ひとりあるはずですよ。尊厳というのは、その、おかされてはいけない、その人固有の領域といえるのではないかと思います。少し抽象的かもしれませんが、そのような尊厳を一人ひとりが持っていることを、まず確認しておきましょう。

ハラスメントの問題——それが性的な側面を含むセクシュアル・ハラスメントであったとしても、含まないパワー・ハラスメントやキャンパス・ハラスメントであったとしても——は、差別の問題、人権の問題である、いじめの問題である。それは、この一人ひとりが持っている

るはずの尊厳がおかされる出来事であるからです。私は、尊厳を守るためには、人と人との関係性を考えていくことによって、少しでも良い方向に向いていくのではないかと、またハラスメントを減らしていくことができるのではないかと考えています。

人間は、誰もが一人で生きていくことはできません。皆さんもすでに、入学式であたらしい大学の友だちをつくった人もいるかと思います。またこれからの大学生活のなかで徐々につくっていきこうと思っている人たちもいるかもしれません。そのような友だち関係も含めて、人と人との関係性というのは、一時期、流行った言葉ですが、自分自身を見つける、自分を探す旅とも密接にかかわっていることと思います。「自分とは何だろうか、なぜ自分は生まれてきたのだろうか、何のために生きているのだろうか」。また、「自分の人生にどんな意味があるのだろうか」。そう考える機会は、皆さんにもありますか？ なぜ、自分のことを考えるのか。それはやはり他者との関係性のなかで試行錯誤していくものなのだと思います。たったひとりであれば——そのようなこと自体、この世に生きているかぎり、ほとんどありえないことだ



とは思いますが――、わざわざ“自分”が“生きる”ことの意味など、考える必要はないからです。

皆さんは、今、まさに大学に入って、そしてこれから4年間のビジョンを描こうとしている人たちもいるかもしれません。卒業後にどんな仕事につこうかと考えている人もいるかもしれません。そのために何を勉強していくか、そういう計画を立てている人もいるかもしれませんよね。大学というところは、勉強するだけではなく、卒業しても続いていくような人間関係をつくる場所として機能している側面もあると思います。先ほど、「自分さがし」という言葉が流行した時期があったといたしましたが、“自分とは何か”を考えること、暫定的であれ、そのこたえを見出していくことは、人との関係性のなかでのことだと思います。

私が尊敬しているフェミニストの研究者のひとり、岡野八代さんという人は、こんなことを言っています。

「自己のアイデンティティは、他者によってのみ決定されるわけではない。しかし、わたしたちが言語を他者から学ぶことによって習得していくように、自己の輪郭もまず、他者との関係によって形成されていくの

である。〈わたし〉を定義することは、他者とわたしのあいだにある差異において、その差異のなかでも『意味のある』差異を見いだすことを意味するからだ』（岡野八代、2003、『シティズンシップの政治学』白澤社、147頁）。

自分が何者であるのかを考えると、そこには、他者との関係性が重要な位置を占めるということだと思います。もちろん、他者によってのみ決定されるわけではない。しかし、私たちが言葉を他者から学ぶことによって習得していくように、「自分の輪郭」も、まず他者との関係によって形成されていく。〈わたし〉という固有の存在を見つけ出していくこと、自分自身で「自分の輪郭」に気づいていくこと。そのプロセスには、誰かとの関係性のなかで、共通していたり、異なっていたりするという感覚を何度も繰り返して実感していくことによって、「自分の輪郭」が自分のなかでかたちづくられていきます。ただ、共通点にしても、異なっている点にしても、あまり自分にとって大事なことでなければ、人は、そのまま通り過ぎていきます。

先にご紹介した岡野さんは、「意味のある差異」とい

う表現をしています。自分が誰であるのか、どんな意味を持って生きているのか、それは誰かとの対話や、また社会の中での位置づけ、自分がどういう立場にあるのかを考えていく中で見出していくものです。人と出会って「ああ、この人と、こんな違いがあるんだな」、「この人と、こんな共通点があるんだな」と見出していくことによって「自分の輪郭」がつくられていくということです。そして、関係性が自分にとって重要であればあるほど、自分が何者であるのか、どんな意味をもって生きているのかについて、影響を受ける度合いが大きくなっていくということだと思います。言い換えれば、それは社会の中での相互作用、互いに作用していく産物として生み出されて自分自身に名前がつけられて、どういう人間なのか輪郭をつくっていくということにもなるわけです。

「自分は一人で生きているぞ」と思っている人も、必ず誰かとの関係性で生きている。この世の中で単独で生きているわけではない。多くの相互作用が起こって、そして「自分の輪郭」をつくっていく。——そういうプロセスを私たちはつねに生きているのではないのでしょうか。誰かと出会い、関係性をつくっていくときに、最も大事

なのは、その人自身の尊厳とどのように向き合っていくか、ということだと思います。

では、人間の尊厳とは、いったい、何でしょうか。誰もが他の人からおかされてはならない大事な領域があるというけれども、誰もがその領域をおかすことなく生きていくことも、また、困難ではあります。つまりは、そのなかで、私たちは、さまざまなかたちで対話を継続し、「妥協」しあうなかで、他者の尊厳をおかすことを少しでも減らしていくことが必要になってくるのだと思います。

#### ▼具体的な“出会い”から

尊厳と言ってもちょっと抽象的でしょうか。少し私自身の体験をお話しましょう。10年以上前の話です。私は大学を卒業して、その後に大学院に進みました。そして、そこも卒業して、仕事を始めました。私はキリスト教の牧師になり、教会で働いていました。ちょうど一年ちょっとが過ぎたころ、精神的に体調を壊した時期がありました。そして、2カ月間、病氣療養というかたちで休職しました。実際に、休んでみると、職場の人たちや教会の

信徒の人たちがいろいろと心配してくれるんですね。家においてご飯をちゃんと食べているか。様子をみに行かなくて大丈夫か。それはそれでとてもうれしいことではあるのですが、当時の私には受け答えをする余裕もなく、しんどいなと思って、どこかに逃げようと思いました。精神的に体調を壊していたので、そういう仕事の関係性がしんどくなったんですね。先ほど偉そうに「関係性が大事だ」と言いましたが、私自身は、その関係性自体がしんどくなった時期がありました。

その時、妹が、アメリカのロサンゼルス、ハリウッドという映画の町で生活していたので訪れることにしました。働き始めて1年ちょっと、自分探しという言葉が流行っている時期で、私もその時に「自分にとって自分の人生ってどんな意味があるんだろう」と考えている最中でした。ハリウッドに3週間くらい滞在していて、ほぼ毎日、その近くにある「ロサンゼルス・レズビアン・ゲイ・コミュニティ・センター」というところに通って行きました。同性愛者たちが、地域社会の中で少数者として存在している。少数者であるが故に、いろいろと生きにくい状態がある。そのためのサポートセンターで、地域

に根差したさまざまな活動を行っているところです。

私は、ハリウッドに滞在している期間、ほぼ毎日、そのセンターに通いました。先ほど、「自分探し」と言いましたが、当時、私は、同性愛者であるという自覚を持ち、そして葛藤していました。いまでは、同性愛者であることを公表して、さまざまな活動をしたり、この花園大学でも人権科目で「セクシュアリティ研究」という同性愛者の人権に関する授業を担当していますが、当時は、まだ、同性愛者であることをなかなか自分で受け入れることができなかつたのです。そのあたりの葛藤については、『「レズビアン」という生き方 ――キリスト教の同性愛主義を問う』（新教出版社、2006年）という本にも書いていますので、興味のある方は読んでみてください。

レズビアン・ゲイ・コミュニティ・センターに行って、文字通り、そこには多くの同性愛者たちがさまざまなプログラムに集っているわけですから、私は自分の人生の意味を考えるきっかけを見出そうとしていました。自分が同性愛者であることを受け入れているつもりではいる。でも、そうやって受け入れてしまうと、今後、もっとしんどい状況が生まれてくるのではないだろうか。そんな

葛藤を抱えながらの訪問でした。

そこで一つのプログラムに出会いました。日曜日の午前中のことです。コーディネートをしていたのは、デイヴィッドという人でした。瞑想する時間というプログラムです。それまでにもいくつかのプログラムには参加していたのですが、言語の問題もある。言葉で、つまり慣れない英語で、ワーッと議論するよりは、自分も疲れていたので、瞑想する時間があるなら、これに出てみようと思って行ってみました。コーディネートをしていたデイヴィッドさんは、静かにゆっくりと自分自身の体験を語ってくれました。

彼はエイズという病を抱えて生きている人でした。当時、エイズには特效薬と呼ばれるものがありませんでした。H I Vというウィルスが身体に入って潜伏期間がありますが、そこからエイズを発症した場合、「死に至る病」だと言われてもいた時代です。今では薬が手に入れば発症を抑えることもできるし、延期することもできますので、H I Vウィルスに感染してエイズを発症しても、すぐ死に至る病だということは、この日本では多くは言われていません。薬があるということです。ただ、その

薬は非常に高価なんです。薬を手に入れることができない人たちは今も1日に多くの人々がエイズで亡くなっていく。とくに、アジアやアフリカの国々の女性たち、子どもたちが犠牲になっていることを忘れてはならないと思います。薬の特許があるのはアメリカ合衆国です。言ってみれば、薬の特許を独占しているかたちで、高価になるわけです。ですから、経済的に「貧しい」地域には、薬は行き渡らない。そんな現状があり、大きな格差が横たわっているのが、エイズをめぐる現状です。

話を元に戻しますと、私がアメリカに訪れた当時、今から20年近く前は、エイズの特効薬がありませんでした。「死に至る病」と言われていたことと合せて、もうひとつ、問題がありました。当初、H I Vウィルスはどこから来て、なぜエイズを発症するのか、わからなかったんです。今ではH I Vウィルスというウィルスが身体の中に入ってきてエイズという病気を発症するということが名前はつけられたけれども、当初、この病が出始めた時には、原因がわからなかった。そして、感染する人たちの多くは、たとえばアフリカ系アメリカ人たちであったり、麻薬を使っている人たちであったりしました。その



うちでも、経済的にしんどい状況に置かれた人々が多かったようです。また、男性同性愛者の感染率も非常に高いと言われていました。つまり、社会の中で少数者、社会的に力が削がれている人たちが、多く、エイズの被害にあっていたわけです。

本来ならば、感染が拡大していくときに、「これは原因を考えないといけないじゃないか、予防しないといけないじゃないか」という話が行政のあいだで起こるはずですが、エイズの場合は、先にあげたような、少数者の人たち、社会的に力を削がされた人たちが、病気に罹る率が高かったので、なかなか行政の人たちが措置をとらなかつたんですね。病気を予防するためにもの考えようとか、薬を開発しようということがなされなかつたという状況がありました。予防や治療のために、もうちょっと経済的に豊かな人たち、社会的に少数者ではない多数者の人たちが誰でもが罹るような病気であれば、資金もちゃんとかけて予防していこう、薬をつくっていこうということが考えられたのですが、少数者であるが故に、そういうことはやらなかつたわけです。しかし、後に、H I Vは誰でも予防しなければ感染するもの

だと認識されるようにはなりません。

アメリカでは1980年代前半くらいにエイズをめぐる大混乱が起きていました。そんな時代でした。私が行ったのはそれよりちょっと後の時代です。日本では最近、基地の問題もニュースで流れることもあります。アメリカに追従していくケースが多いんですね。エイズの場合もそうでした。1980年代末には「エイズ予防法案」というものができました。多くの反対があったにもかかわらずです。この法案は、医者に感染者の名前と住所を都道府県に届ける義務を課すなど、感染者を隔離したり、管理したりする目的のものでした。感染したらいちばんしんどいのは本人や周囲の人々です。しかし、かれらに対する配慮のない法律だったのです。

さて、デイヴィッドはH I Vウィルスに感染していて、すでにエイズを発症した人でした。彼は同時に男性同性愛者だったんです。ゲイでした。彼もキリスト教徒でした。以前は教会に行っていたそうです。しかし、行けなくなった。だから、瞑想の時間というプログラムをコーディネートしていたわけです。みなさんは、宗教をどのようなイメージでみていますか。宗教は、本来、人を幸

福にすることが目的として共通しているとおもいます。しかし、キリスト教に限らずだとは思いますが、実際には、多くの宗教は、特定の人々をどこかで排除していく機能も持ってしまうのが現実です。

デイヴィッドは、キリスト教徒でした。そして、キリスト教では、その一部ではありますが、アメリカ合衆国でエイズが広がって行った時、「あれは男性同性愛者に対する神が下した罰なんだ」と言われていました。このような排除の言葉が、まことしやかに言われていたわけです。デイヴィッドも自分がH I Vウィルスに感染したことに気づいた時、とてもとても落ち込んだそうです。彼は、H I Vウィルスに感染し、そしてエイズを発症したとき、どうにも自分を受け入れられなかったと話してくれました。自分だけでは抱えきれなくて、教会の友人に話をした。しかし、その友人たちからかえてきたのは、余計に彼を不安にする言葉でした。「神様がお前に罰を下したんだ」と。そして、心ない言葉にさらされながら、彼は教会にも行けなくなった。「だから今、こうして瞑想の時間を持っているんだよ」という説明をしてくれました。

なぜ、自分がこんな運命になったのか。どうして生まれてきたのか。生まれてきた意味なんてないのではないか。あと少しの命で、もう終わりが見えているのだったら、もうこれ以上、しんどいなかで生きる必要はない。——そんなことを考えながら、自暴自棄になっていたそうです。たくさん泣いたし、たくさん周りの人たちに当たり散らしたし、自分が生まれたこと自体を恨んだと言っていました。どうしても受け入れることができなかつたんですね。いろいろ考えて彼が出した結論はこういうことでした。

キリスト教の人間は皆、「お前がゲイだから、病気になったんだ。エイズになったんだ」と言うけど、でも、これはもしかして何か意味があるのかもしれない。時間をかけて考えていくうちに、おそらくこれは何らかの罰ではなく、「神から与えられたギフトなんだ」と考えるようになったそうです。もちろん彼はそれを自分一人ですずっと考えて、そういうことを見つけていったんだと、その時は思ったけど、考えてみたら周りに当たり散らしていた友人たちとか、家族とかと話をしていく中で、「これは罰ではない、ギフトなんだ」と認識していくこ

とができたのだと話してくれました。後から関係性の中でようやく受け入れることができたんだと気づいたということでした。

もちろん、彼の状況について、第三者が「神から与えられたギフトだ」と判断することはできません。ほかの誰でもない、彼自身の運命だからです。でも彼はこう言っていました。「病にならなければ気づかなかったことがたくさんあった。病になったから自分は気づくことができたんだ。じゃ、残された人生を精一杯生きよう」と。大事な自分の存在、これまでの歩みについて、気づかせてくれた友人たち、周囲の人たちとの関係性を、もう一回見直していこうと思ったそうです。そんな話をしてくれました。

この会合は、先ほどもご紹介したように、日曜日の午前中にありました。ちょうどお昼になり、ランチにしようということになりました。集まっていた10人弱のメンバーが、カバンから食べるものを取り出し始めたわけです。毎週集まっている人たちの中で、ランチは皆でそれぞれが持ち寄って、それを分け合って食べようという約束だったそうです。私は初めてだったので何も持ってい

なかった。あわてて「サンドウィッチでも買ってくる」と言うと、デイヴィッドもそこにいた人たちも言います。「わざわざ買いに行かなくてもいいよ。十分あるんだから」と。「いや、でも、もらうだけだったら、申し訳ないし」と戸惑っていると、デイヴィッドは、こう言いました。「君がここにいること、それだけでいいんだよ。僕たちにとっては、君が、遠い日本から来て、たまたま、ここに参加してくれた。僕たちの話を聞いてくれた。そしてお互いの話を分かち合った。それ自体が、神から与えられたギフトなんだと思うよ」と。

多少、きざったらしい言葉に聞こえるかもしれませんが、しかし、その「ギフト」という言葉は、先のデイヴィッドの話とつながって語られた言葉です。私も自分を肯定できずにいろいろ探している最中だったので、「自分自身の命が大事なんだよ」ということを教えられたような気がしました。デイヴィッドの「神が自分に対して与えたギフトなんだ。あとを精一杯生きるぞ」という話を聞いたことと重ねて考えさせられたことがあったわけです。

いろんな経験をしてきましたけれども、デイヴィッドとの出会いは大きく印象に残っていて、私の中では人間

の尊厳ということを考える時に、思い出すひとつの事柄です。彼の連絡先を聞いていなかったのも、その後、彼がどうなったかわかりません。でも会えなくても、もし彼がこの世からいなくなっていたとしても、彼の人生で感じたことを伝えられる言葉として、彼の表情と言葉が私の中に残っているわけですね。それもまた与えられたギフトなのかなということを考えています。そういう尊厳のあり方、感じ方もあると、私は思っています。

#### ▼ “出会う” ことの可能性

尊厳というものが人に伝わっていく時に、どういうイメージを持って考えたらいいかということも同時に考えさせられます。私はデイヴィッドに出会った時、後々に考えていったことですが、これを“共振”と呼ぶのかな、と考えたことがありました。

“出会う”というのは、“共振”の積み重ねだと思ったりもします。誰もが、共鳴板のようなものを、どこかに持っている。板でなくとも、膜のようなものをイメージしてもらっても良いかと思います。共鳴板、もしくは共鳴膜のようなものを持っている。そして、自分以外の

誰かと触れる時、話をしたり、その中で自分とその人との間に共通点を見つけたり、時には自分が経験したこともないようなことに触れて「自分には想像できないけど、すごいことだな」と感じる時、そういう時に、私は、その人が持っている共鳴板のような物が振れる瞬間があるのだと思っています。振れる、波立つ、わけです。その波立ちは、小さなものであっても、確実に振れていて、そして、自分にとっての大事な経験となって積み重ねられていく。時に、自分だけではなく、触れ合うことによって、お互いの共鳴板がともに振れ合う瞬間がある。互いに波立って行って波長が伝わり合う瞬間がある。「伝わりあったな、共通点があったな」と感じる時もあれば、逆にがっちりと基盤の上に立っていると思っていた自分の足元、存在基盤そのものが問われ、揺さぶられることもあると思います。自分の依って立っている場が振れる、大きく揺れる、そんな瞬間があるのではないのでしょうか。その両面があるのかなと思っています。

ただ、会うとか、知り合いになるとか、そういうことも大事だとは思いますが、しかし、私は、“出会い”というのは、もっと深いところで積み重なっていくもの、



その人自身のそれからの生き方に決定的に変化をもたらすようなものとして、とらえています。そこで立ち止まって、そして考えて、経験を積んでいくこと。それによって、より広い世界が自分の中に広がっていく可能性が生まれていきます。“出会い”というのは、共鳴板が振れる瞬間、その瞬間が何度もつながっていくことなのではないかと思います。人と人との関係性の中で、尊厳を大事にしていくには、そのような“出会い”を積み重ねていくことが不可欠なのだと思います。

先ほど、ハラスメントの問題を考える時、尊厳を大事にしていこう、“出会い”の中で、自分のことや周囲の人たちのことを考えていこう、と言いました。そして、そのことによって、ハラスメントを少しでも減らしていくことができるのではないかと言いました。つぎに、もう少し具体的に、ハラスメントの話に入っていきたいと思います。

### ▼「セクシュアル・ハラスメント」のイメージ

皆さんは、「セクシュアル・ハラスメント」とか「セクハラ」という言葉を聞いて、どんなことを思い浮かべ

ますか。この数年、私は、セクシュアル・ハラスメントに関する講演に行ったり、授業でお話をする事が多くなりました。とくに大学生の世代の方々に、授業の中で感想やコメントを書いてもらったりすると、身近なところで「セクハラ」に遭った人たちがいるというケースが多くあることに気付かされます。

そのなかで、昨年、ある大学でいちばん多かったのは、男子学生が「自分の彼女（恋人）がセクハラにあったことがある」というケースです。しかし、よくよく読んでみると、「電車の中でセクハラにあった」と書かれているケースが多い。いわゆる「痴漢」の話です。どうでしょうか。皆さんも、「セクハラ」と聞いて、電車やバスでの「痴漢」を思い浮かべる人が多いのでしょうか。

もちろん、「痴漢」も問題ですし、犯罪です。このことも考えていく必要があるとは思いますが。しかし、「セクハラ＝痴漢」という図式のなかで、認識されなくなる問題があることに、私は懸念を感じています。「痴漢」の場合、多くは、加害者は“見知らぬ人”ですよね。顔見知りもいるかもしれない。けれども、基本的には、「知り合い」とは言えないような間柄の人たちの中で、

加害／被害が起こっているのが、圧倒的多数だと思います。

しかし、セクシュアル・ハラスメントの場合（レイプの問題も同様なのですが）、加害者の多くは、「ノン・ストレンジャー」だと言われています（参考：牟田和恵、2001、『実践するフェミニズム』岩波書店）。「ノン・ストレンジャー」、つまり、“ストレンジャー（見知らぬ人）ではない人”です。日常的な関係性の中で、セクシュアル・ハラスメントや、そのほかのハラスメントが起こるのだ、ということです。知らない人が加害者であれば、注意する方法もあるかもしれない。しかし、日常的な関係性の中でハラスメントが起こってくると、それを避けることは非常に難しくなっていきます。いやだという思いを持ったり、避けようとしたりすると、自分の日常生活をどこかで切り分けてしまわなければならなくなってしまふからです。

もちろん、セクシュアル・ハラスメントと「痴漢」の問題は重なってくることもあるかとは思いますが。しかし、イコールで結びつけてしまう時に、このような、セクシュアル・ハラスメントは日常生活の中で起こりうる問題だ

ということを見落としてしまうことになるのではないかと  
思うのです。

なぜ、「セクハラ＝痴漢」という図式が生まれてきた  
のでしょうか。そこには、おそらく、「セクシュアル」  
という言葉が過剰に取りざたされるという背景があるの  
ではないでしょうか。「痴漢」のイメージと同時に、大  
学生の方々にちらほら見受けられるのは、「アダルトビ  
デオ」のイメージだということも、昨今、気になるとこ  
ろです。たしかに、インターネットの検索エンジンを使っ  
てみると、「セクハラ」とか「セクシュアル・ハラスメ  
ント」という検索語で、アダルトサイトがいくつかヒッ  
トします。「セクシュアル」という言葉、つまり「性的  
な」という言葉が一人歩きしてセクシュアル・ハラスメ  
ントの問題かわかりにくくなっているのも一つ事実では  
あるのかもしれません。しかし、この「セクシュアル」  
という言葉、「性的な」という意味合いだけで、セクシュ  
アル・ハラスメントをとらえようとする、また、問題  
の本質からは遠ざかってしまうという落とし穴も待って  
いるわけです。

## ▼ハラスメントの構造

差別問題、人権問題としてのセクシュアル・ハラスメントを考える時、そこには二つの柱があると思うんです。

一点目は、「性的な」側面をもつということです。しかし、同時に、その「性的な」側面だけではなく、もうひとつの柱があるということです。「性的な」側面だけを強調されすぎてしまうと、落とされていく問題です。ほかのハラスメントの問題にも通じる事柄ですが、二目の柱は、そこに権力関係があるということです。力関係が横たわっている。この権力関係がベースになって、セクシュアル・ハラスメントは引き起こされていきます。多くの「痴漢」のケースとは異なり、ノン・ストレンジャーが加害者になるということは、日常生活のなかで、ハラスメントが起こりうるということです。であるがゆえに、非常に解決が難しくなってくる。

権力関係とは、たとえば、皆さんは、どのようなものを想定されますか。大学で言えば大学教員と学生さんということもあるでしょう。大学の職員と学生さんというケースもあるでしょう。またクラブ活動、サークル活動での先輩と後輩の関係もあります。学生さんがつねに

「弱者」の側に立っているわけでもない。また、学校以外の場所としては、アルバイト先なども挙げられます。たとえば、アルバイトとして仕事をしていて、社員の人からハラスメントを受けているというケースも、これまでに、私も聞いてきました。いずれの場合も、立場が弱いということ、そして、より力の強い側が加害者になりやすいということです。立場、力が弱いと、目の前にある事柄に、「いやだ」と意思表示をできないことが多いです。皆さんには、そのような経験はないでしょうか。想像してみれば、どこでも起こりうるということなのです。

そして、たとえば、自分にとって、その関係が大事であればあるほど、「いやだ」という意思表示は難しくなります。それで関係性が壊れたらどうしよう、少しくらいは我慢しておこうという気持ちがあるからです。第三者としては、いやなことがあれば、その場を離れば良い、と考える人もいるかもしれません。しかし、大事だと思えば、自分はそこから離れたくないと思うわけです。だから「いやだ」と言えない状況がどんどん強くなっていく。しかし、どうしようもできない。そこに留まろう

としてしまう。その悪循環が起こっていくわけです。日常性と権力関係の結びつきは、じつに巧妙にできていて、そして、逃れることが難しい。そう考えていけば、たとえば、いじめの問題で追い詰められていくことと、とても似ているとお気づきになるのではないのでしょうか。

昨年、神戸の須磨で、高校生が校舎から飛び降りたという事件がありました。彼は自ら死を選んだ。後々明らかになっていったわけですが、彼は親友との関係の中で追い詰められていったということでした。周囲は、仲が良い二人だと思っていた。しかし、二人の関係性の中には、いろんな脅迫が起こっていた。お金を巻き上げられたりということもあったわけです。二人とも学校で人気者だったと周りを見ていたようです。自ら死を選ばざるをえないまでに追い詰められたとき、ようやく周囲は、二人の間にあった事柄に関心を向け始めます。私は彼らのことを知らないのです、勝手に判断することはできないかもしれません。でも、なぜ逃げられなかったのだろう、と感じが得させられます。多分、亡くなった人にとっても、とても大事な友人関係ではあったのでしょう。であるから脅迫された場合に逃れられないような状況が生ま

れていったのだと思います。「いやだ」と言えない。逃げられない。そのような中で、どんどんと、暴力のサイクルの中に入っていく。なおさら逃れられなくなっていく。そこでも悪循環が起こっていたのだと思います。

その状況を見ていて、なぜ、周囲の人々は、加害者になった高校生に、「ちょっとやりすぎじゃないか、問題じゃないか」と言えなかったのでしょうか。ほかに介入できる友だちはいなかったのでしょうか。本当に大事な人間関係であれば、加害者の側もしんどいことだと思います。友だちを死なせてしまったわけですから。周囲に「ちょっと立ち止まって考えてみようよ」と言える環境があったのであれば、事態は大きく変わっていたのではないのでしょうか。何か回避していけるような回路が、もしかしてあったかもしれないのではないのでしょうか。

こうやって、いじめの問題、人権の問題としてくくってしまうと、セクシュアル・ハラスメントの「性的な」という側面がわかりにくくなってしまおうでしょうか。その点について、もう少しお話しをしておきたいと思います。皆さんは、「性的な」ものとは、どういうことをイメージされますか。「性的な」ということを定義するの



は、とても難しいと思います。なんとなく、“いやらしいこと”というイメージがあるのでしょうか。正面から語れないこと、公の場では語れないこと、というイメージもあるかもしれません。では、何がセクシュアル・ハラスメントで問題になってくるのでしょうか。ここでは、二つ挙げておきたいと思います。一点目は性別による“らしさ”の問題、そして二点目に先ほども少し触れましたが、性的指向 (sexual orientation) の問題です。

まず、性別の問題について。世の中で、「女らしさ」・「男らしさ」と思われているものにまつわる事柄です。これも個人によって、いろいろな差があるとは思いますが。そして、時代や文化によって変化していくものです。たとえば、私の学生時代のことを振り返ると、男性がエステに行くなんて考えられないことでした。しかし、一時期、あるエステ会社がジャニーズのタレントを宣伝に起用し、「男もキレイになりたい」というスローガンのもとに、雑誌などでも特集を組まれたり、男性エステが宣伝されていくようになります。つまり、そこで男がエステに行くことは、「男らしくない」と判断されることが薄れていくことになります。この例をひとつとっても、

ここ10年、20年ですいぶんと変化してきていることに気づいていただけるかと思います。

ただ、私たちの社会では、女の人として育てられることと、男の人として育てられることの間には、非常に認識のずれがあるんですね。エステひとつとっても、そのイメージは変わってきている。しかし、性に関する情報や性産業をめぐる状況なども、男女差は大きいものです。どこかでまだ、男性は性的に奔放であることが「男らしさ」として、性的に従属的であったり、禁欲的であったり、清楚であることが「女らしさ」として、認識されている部分も強く残っていると思います。その認識のずれが、人間関係の中で、大きな影を落としていく場合もあるということです。ずれていることに気づかない、気づけないことが、セクシュアル・ハラスメントを起こすことがある。セクシュアル・ハラスメントについて、皆さんが加害者にも被害者にもなりうる可能性は、ゼロであるとはいえません。しかし、圧倒的多数のケースは、被害者は女性であり、加害者は男性である。認識のずれに気づけなかったり、そのずれを修正できなかったりすることによって、これらのケースが起り続けていること

もまた事実です。

もう一点、「性的指向」の問題があるといたしました。セクシュアル・ハラスメント対策の中でも落とされてきてしまったことです。男とはこういうもの、女とはこういうものと考えられる中で、女と男は相補的な関係性をもつと認識されることが、まだまだ少なくともありません。つまり、女と男はひとつのセットであるべきだ、という考え方です。これを「異性愛主義」といいます。世の中には男と女が存在している、そして、その双方が「対」をつくるのがあたりまえだ、とする価値観です。そうすると、そこから外れる人たちの存在を想像することができなくなってしまいます。

たとえば、同性愛者として生きづらさを抱えている人たちは、日本にはまだまだたくさんいます。そういう人たちがなぜ声を上げることができないのか。同性愛者であることを公表すれば、社会からはじき飛ばされてしまうからです。またそこでも認識のずれが生じてしまうわけです。世の中には、同性愛者はいない、と思っている人々と、そして、自分は同性愛者であるけれど、それをいえない人々との間の認識のずれです。セクシュアル・

ハラスメントの問題を考える時に、先のような性別役割分担や、「男らしさ」・「女らしさ」の中で生じるずれや思い込みだけではなく、男と女が「対」になることをあたりまえとする「異性愛主義」という、社会の価値観で生じるずれや思い込みについても考えてかいたければならないと思います。

今日、皆さんのお手元には、入学式で書類が配られていると思います。その中には「花園大学セクシュアル・ハラスメントに関するガイドライン」、「キャンパス・ハラスメントに関するガイドライン」、「STOP! セクシュアル・ハラスメント」のリーフレットが含まれています。そこにはいくつかの具体例が書いてあります。ぜひ、自分と周囲との関係を考えるために、読んでみてください。もし、皆さんが4年間の大学生活の中で被害者になってしまった場合、日常生活の中で、とてもとても大事な関係性の中で起こった問題であるほど、問題はわかりにくく、そこから自分が逃れにくくなっていくわけです。何かの役に立つこともあるのではないかと思います。

## ▼わたしにとっての「人権教育研究センター」

では、悪循環に陥っていく時、また「いやだ」と言えない状況に置かれる時、どのように回避していくことができるのでしょうか。ハラスメントの被害に遭った時にも同様かもしれませんが、自分の状況を話すことのできる場を確保していくことが、何よりも大切だと、私は思います。

皆さんはこれから4年間、どんな関係性をつくっていかれるのでしょうか。サークル活動やクラブ活動をするのもよいでしょうし、勉強の中でいろんな仲間たちができていくのもいいことかもしれません。大学という場は、しかし、自分で見つけていかないと、なかなか「居場所」を見つけることが難しいところでもあるのだと思います。

私はパートタイムで週1回だけ花園大学に来ています。いくつかの大学に行っているのですが、その場での特徴がそれぞれあり、面白いと思います。どこに行っても、「外部の人間」なので寂しい思いもしますが、そのような視点から、花園大学を見たときに、私にとっては貴重な場所があります。それは人権教育研究センターです。先程、八木先生が人権教育研究センターについてご紹介されて

いましたが、私は、このセンターは、一つの大きな可能性として、大学という場で、関係性をつくっていくことを提供している場ではないかと思っています。いろんな学生さんたちや教職員の方々、この学校に所属している人たちだけではなく、私のような外から来るパートタイムの教員も出入りすることができる場所です。外から週に1日だけ行く教員にとっては、他の大学では、「居場所」というのはなかなかないものです。しかし、花園大学には人権教育研究センターがあり、そこで学生さんたちや教職員の方たちと一緒に何かを模索し、共有していくことができる。私にとっては、とても大事な場所です。

それは、一つの場ではあるのだけれど、当然、大学の中にあるから、新しい人たちと出会ったり、動きがある場所でもあります。大学では、中学や高校のように毎日朝来て、出席をとって、同じクラスですごすことがないわけですから、多くの生活が自分自身で管理していかなければならない。友だちができなければ、大学は、居場所を見つけるのは非常に難しいところだと思います。なかなか場を見つけられない人にとっては、こういうセンターを活用するのも、一つの方法なのではないかと思

ます。

またセンターが大事な場所だと感じる理由が、私にはあります。年に数回、学校の外にフィールドワークに行くことがあります。差別問題、人権問題を切り口にして、いろんな現場を訪れる機会があります。もちろんそこでは行った先で、現場の人のお話を聞いたり、そこに流れている空気を肌で感じたりする機会があるのですが、その中で自分自身がどうやって生きていきたいのか、誰とつながっていききたいのかというのを問われる瞬間が多くあります。一人でフィールドワークに行っても感じ取れないものが、多くの人たちと行くことによってあるからです。

さまざまな現場を訪れることは、誰と一緒にいくかということが意味を持つのだと、私は実感しています。花園大学の学生さん、教職員の方々、時には卒業生の方々などと、さまざまな場で生きている人たちが集まる。自分とは世代が違う、育ってきた環境も違うわけです。必然的に視点は異なっていくわけです。そういう違いがぶつかりあったりすることもある。面と向かって喧嘩をするわけではなくても、お互いに存在を問う・問われるこ

ともある。そういう貴重な場を体験させてもらっています。皆さんもそういう場にぜひ参加されたら面白いのではないかと思います。

私をご紹介するよりも、実際に関わった学生さんたちの声をご紹介したいと思います。今日、配布されている書類のなかに『花園大学人権教育センター報』第13号(通巻32号)も入っていると思います。そこには、3月に卒業された方々から新入生へのメッセージが掲載されています。彼らが「人権」について語っていることを、少し読んでみたいと思います。

一人は社会福祉学部の卒業生で、「援助者」について記しています。

「援助者は、常にクライアントの意思や生活、生きる権利を尊重し、同じ目線に立ち、側面的に援助していかなければならないと考えています。これらを行っていくためには、まず、人権週間のテーマともなっている『知ること』からなのではないでしょうか。一言で人権と言ったところでそれは漠然としていて、不明瞭なものです。しかし、少しずつ様々な問題に触れて学ぶことで、人権とはどのようなものなのかを具体的に



知ることができたように思います。何も知らなければ、何も知らないまま通り過ぎてしまい、本当に目を向けなければならぬものを見過ごしてしまう。だからこそ、まずそこにある現実を知ることからはじめなければならないと思うのです」(勝原駿「知ることから」63-64頁)。

もう一人の文章を、これも少しだけ読んでおきます。

「何でこの大学に来たの?」というタイトルで、卒業するにあたって、こんなメッセージを書いている人もいます。

「いろんな人が人権研(人権教育研究センター：引用者注)に集まり、そして去ってゆく。『一期一会』という言い方はオーバーかもしれないが、たとえしゃべらなくても、会話を聞いているだけでも面白い。人権研にいと、普段会話をする事のない人と話すことがあるので、自身に何かしらの知識が身につくこともある。それによって、もしかしたら、自分の『何か』が変わり、大きな転機が訪れるかもしれない。だから人生は面白い。しゃべっていても、『何か』が変わる保証はない。けれどひとつ確かなのは、何もしなけれ

ば、何も変わらない」(吉田泰輔「何でこの大学に来たの?」68-69頁)。

いずれも、皆さんのお手元にある文章です。ぜひぜひ、ほかの人たちのメッセージも含めて、読んでみてください。

### ▼さいごに

これからの4年間、どうか、さまざまな“出会い”を重ねてください。ただ挨拶を交わすだけではなくて、一人ひとりが尊厳を持った人間なんだ、そしてそれと向き合っていく、かけがえのない自分であり、かけがえのない周囲の人たち一人ひとりなんだということを実感するような時を、皆さんにぜひ重ねていただければと思います。そんな日々の重なりの中で、ハラスメントを少しでも減らしていく、直接的ではなくても日常生活の中で少しずつ減らしていくことができるのではないだろうか。私はそう考えています。少しでも、加害や被害の回路を断ち切っていく、回避していく道筋が日常の積み重ねの中で、つくっていけるのではないかと思っています。

今日は権力関係と性差別、セクシュアル・ハラスメン

トの問題にも触れながら、お話をさせていただきました。皆さんが加害者にも被害者にもなりうるのだということを、心にとめておいてください。そして困った時、出口が見つからない時、しんどい時に、自分の周りには、“出会い”のチャンスがいろんなところにあるのだ、ということ覚えておいていただければと思います。ありがとうございました。以上で終わります。

